

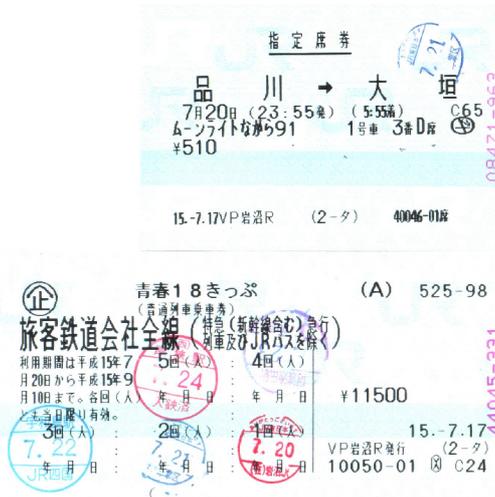
安城付近では、線路脇のキロポストが 333 Km を表していたのが車窓から見えた。

小生が住んでいる自宅前のキロポストも 333 Km 地点であり、ちょうど東京駅を中心に反対の線にきたことを知る。

大府駅あたりで出発してから列車に乗っている時間が 24 時間になることから “ 24 時間 テレビ ” ならぬ “ 24 時間列車 ” になったことに気が付いたが、このまま四国の宇和島駅まで乗りつくしの旅で更に、アップ し、何と、 “ 41 時間列車 ” になり気が遠くなった。

このように列車、ホーム、そして駅から 1 歩も出ず、正に、 “ 引きこもり ” の旅でもあった。

名古屋駅では隣に座っていた若い女性が、この後中央本線で恵那の実家に行くと言い下車した。名古屋駅、尾張一宮駅を過ぎると、もう「快速 ムーンライト ながら 91 」ともお別れであった。尾張「おわり」で終りと、最初から シャレ が出る位に冴えていた。まもなく、終着の車内放送があり、全員、下車の準備に入った。



第二章 四国編

第 2 日目 (7 月 21 日 (月))

瀬戸大橋を渡り、四国へ 初めての宿泊は「国際 ホテル」

内子線 言葉に「訛り」がないと言われる 東北人は全員訛っているらしい

大垣-米原-姫路-岡山-宇多津-観音寺-松山-伊予市-宇和島

最初の宿泊は、いやしくも車中泊で始まったのであった。

車中泊での小生の子守唄は、勿論、レールの音である「ガタン・ゴトン」の列車の音であった。

この音には何故か生命を感じ、人生を感じ、そして本当の旅を感じるのであった。

幼少の頃の旅は夜行列車でゴロ寝が主流であり、ホテル 宿泊なんて考えられない時代に育った為に苦痛ではなく、むしろ、優越感さえ覚えるのであった。

このゴロ寝の方が眠れ、落ち着くが、最近はずがの小生もしなくなっている。